

はせがみ 馳上遺跡 (第8次)

遺跡番号	202-560
調査回数	第8次
所在地	山形県米沢市川井字道下
北緯・東経	37度55分21秒・140度8分18秒
調査委託者	米沢市産業部商工課・置賜総合支庁建設部道路計画課
起因事業	(仮称)道の駅よねざわ建設事業・主要地方道米沢高畠線道路改築事業
調査面積	13,489 m ²
受託期間	平成28年4月1日～平成29年3月31日
現地調査	平成28年4月25日～11月11日
調査担当者	渡辺和行(現場責任者)・森谷康平・安達将行・吉田満・三浦一樹・山田めぐみ
調査協力	米沢市建設部土木課・米沢市教育委員会・置賜教育事務所
遺跡種別	集落跡
時代	古墳時代・奈良時代・平安時代・中世
遺構	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・柱穴・井戸跡・河川跡
遺物	土師器・須恵器・縄文土器・石器・陶磁器・金属器・木製品(文化財認定箱数:80箱)



遺跡位置図(1:50,000)

調査の概要

馳上遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地上に立地する集落遺跡である。1次調査から7次調査まで、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世の遺構・遺物が確認されている。また、平安時代においては遺構の配置や出土した遺物の種類によって役所跡に related 集落と推測されている。

今回の調査では調査区中央の農道を挟み、東側と西側に調査区を分けて行った。東側から調査を開始し、天候や作業の状況を踏まえながら随時、西側の調査区へと調

査を移していった。8月31日に東側調査区が終了し、9月から西側調査区を集中して調査した。また、調査が終了した東側調査区については即時、道の駅に関わる造成工事が開始された。

遺構

東側調査区と西側調査区では検出される遺構に違いがみられた。東側調査区では蛇行する河川跡や古墳時代の竪穴住居跡、時期不明の竪穴住居のほか、溝跡やピットなどが検出された。西側調査区では古墳時代の竪穴住居が1棟、奈良時代・平安時代の竪穴住居が6棟、掘立柱建物が総柱建物・側柱建物を併せて13棟、その他に河川跡や井戸跡、柱穴・土坑・ピットなどが検出された。そのほとんどが奈良時代・平安時代に属し、遺構の密度はこの西側調査区が濃い。

まず、東側調査区であるが、明確な住居跡とみられるのは2棟の竪穴住居のみである。調査区内にピット・柱穴などは存在するが掘立柱建物を組むには至らない。また、河川跡1の東側では人々の生活痕跡を検出しえなかった。このことから馳上遺跡の集落としての東端はこの河川跡と考えられる。

なお、この河川跡1からは多くの遺物が出土した。上

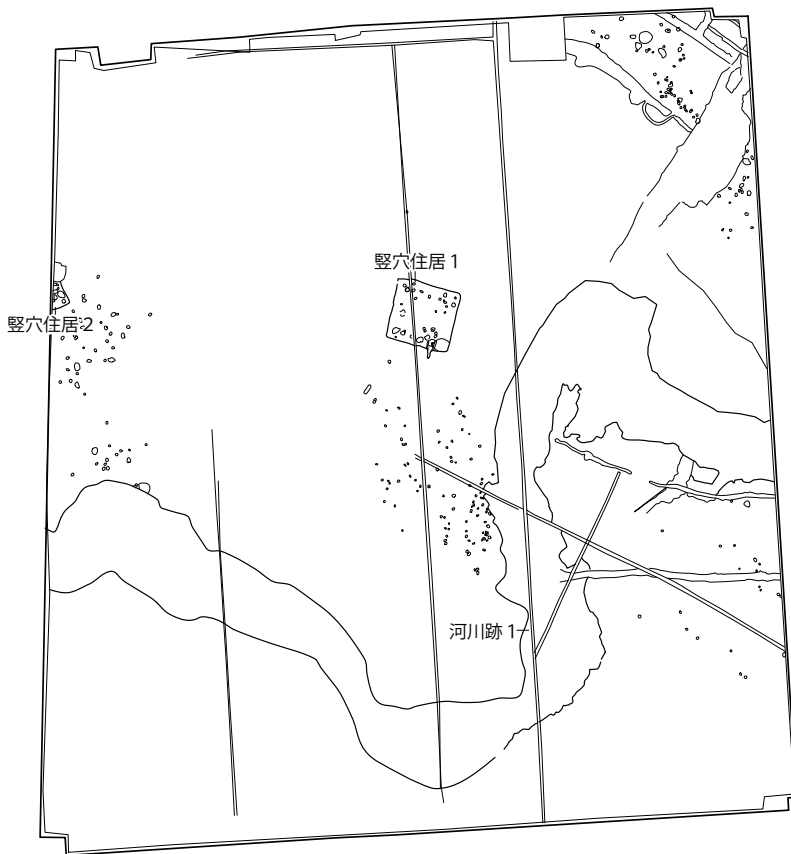
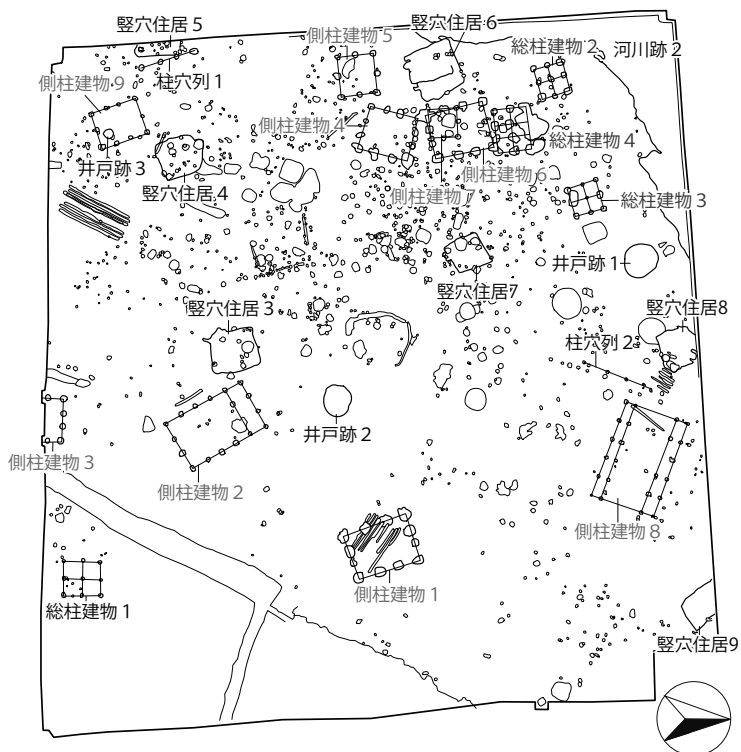


図1 主要遺構の配置図(任意縮尺)



写真1 竪穴住居1完掘状況



写真2 竪穴住居4完掘状況



写真3 側柱建物5完掘全景



写真4 総柱建物2完掘全景



写真5 総柱建物4完掘全景

層に未分解の植物遺存体が堆積しており、そこから木製品が多く出土している。その他に須恵器や土師器・黒色土器といった遺物が出土している。遺物の出土位置は北及び南側に集中しており、集落構成と何らかの関係があると考えられる。遺物の主体となる年代は平安時代と考えられる。中世の遺物は混入していないためこの河川は平安時代中には埋没したと考えられる。

竪穴住居は古墳時代の竪穴住居1と時期不明の竪穴住居2の2棟を検出した。竪穴住居1は古墳時代中期に該当する遺構で遺物はカマドとカマドの北で検出した土坑から主に出土している。カマドは北東側に備えられていた。もう一棟の竪穴住居2は住居の半分以下の検出でそのほとんどは調査区外の南側に延びている。遺物の出土はなく、時期は不明と云わざるを得ないが西側調査区で検出した奈良時代・平安時代の竪穴住居の主軸方向と一致しているため当該期の遺構の可能性がある。

西側調査区では多くの遺構が検出された。掘立柱建物や竪穴住居といった建物が多い。その他に井戸跡や柱穴列・土坑やピット、河川跡が検出されている。そのほとんどが奈良時代・平安時代に属すると考えられる。掘立柱建物については倉庫跡と考えられる総柱の掘立柱建物4棟のほか、側柱の建物や北庇の建物が検出された。また、中世に属す側柱建物8が検出されている。掘立柱建物の内側柱建物6などは柱穴形が四角を呈する。

竪穴住居9は1棟のみが古墳時代前期に属する。それ以外は奈良時代・平安時代の住居跡である。竪穴住居のカマドのほとんどは南側に備えられている。

これらの建物跡は北西側で検出された河川跡2付近に存在している。河川跡の近辺に建物を配置する傾向は第1次調査から第6次調査でも確認でき、今回の調査でも同様の傾向が確認された。また、出土遺物の年代観から竪穴住居が主体の建物構成から掘立柱建物への変遷を見て取れる。

遺物

多くの遺物が東側調査区で検出された河川跡1から出土している。須恵器や土師器といった奈良時代・平安時代の一般的な遺物の他に木製品や墨書土器、硯などといった遺物の出土もみられる。特に墨書土器や硯などは一般の集落ではあまり出土しないものである。

出土した木製品は木簡・鞍の部材・皿・横櫛・鋏・弓

などがある。木簡は2点出土している。鞍の部材は前輪もしくは後輪と考えられ、形状から荷鞍と推測している。

須恵器の坏や黒色土器も多く出土している。壺・甕などの破片も出土しているが相対的に供膳具が多いといえる。須恵器の坏や黒色土器には器に文字を書いた墨書土器と呼ばれるものも多く存在しており、書いてある文字は「王」や「大王」が多い。現在確認されているもののほぼ全てがこの河川跡からの出土で破片点数で100点以上になっている。

また、円面硯と呼ばれる円形の硯の破片も出土している。その出土点数は10点以上で同時期の遺跡の中でも多く、文字を書くという作業を行っていた集団が居たということが想起される。

その他の遺物は竪穴住居からの出土が多い。遺物は須恵器が少なく、土師器の長胴甕が多い。須恵器の器種は貯蔵具である甕や壺がほとんど出土せず、坏、もしくは碗が一つの住居につき1点もしくは2点出土する程度である。各住居とも供膳具が少なく、煮炊き具が多いことが特徴として挙げられる。貯蔵具が少ないことから各住居に水を貯蔵するという行為はせず、集落内の井戸・河川などでその都度必要な量を確保し、使用していたと考えられる。

調査区全体で見た遺物の種類ごとの量は、供膳具である坏類が多く、次に煮炊き具、そして貯蔵具という傾向が捉えられる。

まとめ

今回の調査では以前の調査でも指摘されていた以下のことについて再確認が出来た。

- ①竪穴住居から掘立柱建物へという変遷。
- ②河川跡の近辺に倉庫や建物跡を配置するという集落の構成。
- ③木簡や墨書土器・円面硯といった一般の集落であまり出土しないと言われている遺物の出土。

また、③の遺物は当時の役所に関する遺跡であることも再肯定した形といえる。

新しい知見としては遺跡の東端が河川跡1だと確認出来たことにある。この河川跡の近辺は遺構も疎らであり、河川跡の東側については遺構をほぼ確認出来なかった。

これらを踏まえ、今後は遺跡の性格についてもう少し詳細に検討していく必要がある。



写真6 西側調査区完掘状況



写真7 河川跡1出土木製品：鞍の部材



写真8 河川跡1出土土器類



写真9 側柱建物2完掘全景